



モノサシ 指物師

佐藤重雄さん
(76歳)



現代の名工 甦る伝統の美

父親は、腕の良い建具師だった。作品は今でも市内の家に残っている。重雄氏は、十人兄弟の四番目として旧谷村町に生まれた。
当時の谷村町についてお聞かせ下さい。
そうですね、私が子供の頃は、郡内の景気も良く特に谷

村は、その中心として栄えていました。ですから東京にいる職人でも若い頃谷村で腕を磨いたと言う人は沢山いました。それだけ仕事があったと言う事ですね。
父親についての思い出は、何かありますか。
父は、昔の本当の職人でしたから、非常に弟子にたいして厳しく、封建的なのところがありました。弟子も何人かいたようですが、皆長続きしなかったように思います。子供の頃からそう言った職人気質の父親を見て来たものですか、後を継ごうとは思っていませんでした。しかし、兄弟も多く、そう裕福でもなかったから、早く働きたいと思っていました。まあ父親の仕事を継ぐのが手っ取り早いと言う事だったと思います。皆が寝静まると一人父親の道具を出して仕事を覚ええました。

この欄間は、海外で非常に有名だそうですね。
欄間などの非常に手の込んだ仕事ばかりを手掛けて来た訳なんです、その魅力は何ですか。
私は、江戸時代（文化・文政時代）の町民文化がとても好きなんです。欄間などにもその影響が出ています。それは、洗練された、粋な文化だと思えます。
今、また何か難しい仕事に取り組んでいると伺いましたか。

「すかし」「組子」と言う技法がありまして、「すかし」は、抜いてある模様を浮かびださせるもので、菊が一番難しいと言われてます。「組子」は、細い角材を組んで物を表現するもので、江戸時代この技法で唯一人手掛けたと言う「網干」の模様を作ろうとする準備を進めています。
でも、仕事の楽しさが分かったのは六十歳になってからです。
佐藤さんは、自分の気に入った作品には「谷村作」と名を刻むそうですが？
実際には、東京に住んで居た方が長い訳なんです、私の故郷はこの街なんです。
何処に居ようと谷村の事は忘れられません。ですから数年前こちらに帰ってきました。
私は、この故郷に何か作品を残して置きたい。今はそんな気持ちで一杯です。

の調査を進めています。
非凡な才能を持ちながら激動の時代のなか画家として世に認められた時、病に伏しこの世を去った藤井氏への思いもこの展示会には、込められています。

故藤井霞郷氏

略歴

大正十一年二十四歳のとき第六回下萌会展覧会に「互焼く家」を出品して以来一作毎にその進境を示し、数多同門の士の視線の集まることとなり、大正十三年二十六歳の

とき、第五回帝国美術院展覧会に甲州の山村の情趣を描いた「冬の日」が初入選し、本会の画家として認められる機会を得たのであった。
つづいて大正十四年第六回

帝展に出品した「箴の音」は特選候補として入選し以後毎年帝展に出品して数回特選候補となり注目を集めた。
昭和八年病氣静養のため妻の実家である禾生村小形山に転居した。昭和二十二年六月文部省次官名にて、日展審査委員候補の推せんがあった。

画人としての名譽であり喜んで就任したが、第三回日展が上野の森に開催されたとき身は病床にあり、全快する日を待つのにてついに断念せざるを得なかった。
昭和二十四年にこれまでの精神的苦痛と病状が悪化し、惜しまれて五十一歳で早逝した。